

分別の有る無し

大津 隆文

能登半島地震からの復旧は少しずつだが進んでいるようだ。先日テレビで通常のゴミ回収作業も再開されたが、ゴミ出しの際の燃える・燃えないといった分別が以前のように出来ておらず大変との報道があった。ゴミの量が多くて分別している余裕がないようだ。

ゴミ出しに分別は大切であるが、日常生活には「ふんべつ」が大切である。こちらは善悪、道理をわきまえるといった意味で、もちろん分別のある方が良い。分別は対象の違いを認識、区分けすることで、観察、分析による違いの徹底的究明は科学文明の発展の礎である。他方、違いの認識は自他、男女、人種等の区別さらには差別に結びつく出発点にもなり得る。

興味深いのは分別という言葉は仏教に由来し、仏教では無分別が良しとされることだ。ここで無分別とは自分と他者の区別を乗り越え、全てを包含する境地らしい。今風にいえば多様性を認めるということか。

鈴木大拙師は西洋と東洋を比較し、西洋は聖書にあるように世界を神と人、光と闇、天と地など全て二元的対立で把握しているが、東洋はその前段の二元的世界で全てを抱擁している、とされる。これは無分別の世界であろう。

当然と思われる人種の違いの認識も、生まれた時から黒人と白人の赤ん坊と一緒に育てると自分達は兄弟だと思うそうだ。昔感動したのは、ニューヨークの自然博物館に自分の兄弟のチンパンジー（剥製）に会いに行くという人の話だ。父親が研究者で幼い時からチンパンジーと一緒に育てられずっと兄弟と思っていたという。

通常人にとって、男女、人種、健常・非健常などの違いの認識（分別）をしない無分別の境地に達することは容易ではない。だが分別（区別）を差別に結びつけないことは教育によって可能と信じよう。

球春が到来し、大谷選手の活躍に日本中が毎日ワクワクしている。自分がワクワクするのは同じ日本人だからであるが、その日本人選手を分け隔てなく評価しているアメリカはやはり大した国だと感ずる。